

# 河上肇のマルクス経済学への転身に関して

## —日本マルクス経済学史Ⅱ—

深澤 竜 人

はじめに

深澤〔2018〕は、日本にマルクス経済学（広くはマルクス主義、当時の言葉で別名「科学的社会主義」）が初めて導入され出した時点に、対象を絞り見てきた。時代的には1900～10年の頃であった。この時期、日本においてマルクス主義に関する文献の翻訳と研究が一時盛んとなり、日本でマルクス経済学の研究が途についていくかのように見えたが、1910年の大逆事件で当時のマルクス主義を含めた社会主義運動はいわゆる「冬の時代」を迎えた。

しかしその後「冬の時代」をいわば溶かしていったのは、今回本稿で見ていくように、大正期（1912年～）のデモクラシー運動であり、ロシア革命（1917年）であり、また米騒動（1918年）などの動きであった。これらの影響を受けながら、大逆事件の後、マルクス経済学の日本への本格的な導入が、特には1917年のロシア革命によってマルクス主義の思想と主張が机上のものではなく現実に適用されたことによって、活発になっていった。さらにその後1920年代になると日本資本主義論争他、いくつかの論争が発生するまでになっていく。

これらを醸成させる役割を果たしたのは、マルクス経済学文献の訳業である。マルクス経済学文献の訳本の刊行を見れば、1919年には『資本論』の翻訳が松浦要訳と生田長江訳との二つが刊行され、同年『価値・価格および利潤』の松浦要訳が出る<sup>(1)</sup>。さらに同年、河上肇による『賃労働と資本』の訳がなされる。そして

1920年、マルクス全集の訳業が高畠素之らによってなされていく。このように日本におけるマルクス経済学の本格的導入の時期は、今回本稿で対象としていく1910年代後半に求められるわけである。

深澤〔2018〕ではこうした動きのいわば前史として、日本のマルクス経済学の重要な黎明期（時代的には1900～10年の頃）を確認してきたわけであるが、本稿では前稿を受け継ぎ、時代を少し進め、上記のように日本でマルクス経済学が本格的に導入されていく1910年代後半の状況を対象としていきたい。そこでまた前稿と同じく重要かつ代表的な人物を取り上げ、その者の思想遍歴などを追いながら、日本におけるマルクス経済学の展開を追究していくこととしていく。本稿で対象とする1910年代後半を代表的するマルクス経済学上重要な人物とは、河上肇（1879～1946年）である。本稿ではこの人物を、以下で示す課題対象と合わせて取り上げながら、日本におけるマルクス経済学の展開を追究していくこととする。

河上肇は本論以下で詳細に示していくが、思想遍歴的には最初歴史学派の経済学から出発し、限界効用理論あるいは均衡論（当時の言葉ではいわゆる「ブルジョア経済学」、戦後の通俗的な分類分けでは「近代経済学」<sup>(2)</sup>）に転身し、そこからしかし最終的にはその正反対のマルクス経済学者となっていったという、およそこのような思想遍歴を持つ人物である。本稿で扱う課題対象として、（深澤〔2018〕での幸徳秋水での考察と同様に、）一体なぜ河上肇はマ

ルクス経済学に駆られたのか、「ブルジョア経済学」のどこに満足できなかったのか、マルクス経済学のいかなる要素が彼を引き付けていったのか、これらの問題を追究していきたい。

実はこうした問題を含めて、河上肇についてはかなりの研究がなされている。しかし以下で触れるように、そうした先行研究についての異論も同時に示されている。これらに関して本稿で詳細に検討していくこととするが、その前にまず彼の思想遍歴についてもう少し詳しく確認していくことが読者の便宜にかなうはずである。では節を改めてその点からまず確認していこう。

## 1. 河上肇の思想遍歴

河上肇の経済学に関する思想遍歴に関して、詳細に検討した文献として小林 [1994] に依拠して確認していくとするが、それによると1903年から1928年の間、河上肇は自身の経済学を厳密に言えば四たび替えたと言論している<sup>(3)</sup>。一回目は、歴史学派経済学の中において、国家社会主義的なものから自由主義的なものに転化。二回目は、経済学を自然科学なみの「精確科学」たらしむべく、自身の理論基底を限界効用理論または均衡理論へと移行。三回目は、社会改良主義者から社会革命論者に変身。四回目は、マルクス主義者からマルクス＝レーニン主義者へと最終的に転化。小林 [1994] はこのような整理を行なった上で、さらにその時期区分も同書で詳細に明示している。

まずここまで整理して簡単に言えば、経済学者河上肇は最初歴史学派的立場から出発したのだが、その後限界効用学派あるいは均衡論の学派・理論に転身し、その後最終的にはマルクス学派へと自身の経済学を替えていったわけである。（筆者〔深澤〕あるいは通説・一般的には、

小林氏のいわれる転化・転身の三・四の区分けはなされておらず、同類としてのマルクス主義者あるいはマルクス経済学者と把握されている。）こうした認識把握に関しては、河上肇研究ではおよそその共通了解事項であろう。

ただししかしそこでの問題となっているのは、あるいは本稿でも対象課題としていくのだが、河上肇がマルクス主義者・マルクス経済学者へと転身していく際の、その時期の確定である。これに関しても一般的・通説的見解があるのではあるが、その通説に対して近年異論が投げかけられているというわけである。では次にその河上肇がマルクス学派へと転身していく時期の一般的な通説、それに対する異論、これらを以下見ていこう。

## 2. 河上肇のマルクス経済学への転身その時期に関して

### ①通説としての1919年説

上記のように、最終的にはマルクス経済学者へと転身していく河上肇であるが、その転身・旋回していく時期に関して、一般的な見解としては、1919年頃とされている。（次ページに本稿での対象時期となる1919年前後の河上肇の著作を、『河上肇全集』の編集とは別に、編年表年表として作成しておいたので、併せて参照されたい。この健筆ぶりと著作の多さには感銘を受ける次第である。）この1919年説を筆者（深澤）は「通説」としておく<sup>(4)</sup>。

### 河上肇による回想

この1919年頃とする根拠はいくつかある。まず一つは河上肇本人による回顧・回想である。彼は後年1943年から記していった有名な『自叙伝』という回想録によって、次のように言明している。

## 河上肇の著作年表 (主に 1917 ~ 20 年頃を対象)

年	月・日	著 作	出版・出典
1916	4.1	「奢侈ト貧困」	『経済論叢』2巻4号
	6.1	「樺田法学士に答ふ」	『国家学会雑誌』30巻6号
	9.12~12.26	「貧乏物語」	『大阪朝日新聞』
1917	1.1	「節儉弁」	『大学評論』1巻1号
	1.9~1.11	「英大宰相ロイド・ジョージ」	『大阪朝日新聞』
	2.1	「小学読本に現はれたる経済事項」	『太陽』23巻2・3・4号
	2.1	「『一経済学者の第二思想』ヲ読ム」	『経済論叢』4巻2号
	3.1	「貧乏物語」〔初版〕	弘文堂書房
	4.1~1918.4.1	「Unto this Last ヲ読ム」	『経済論叢』4巻4号
	4.15~4.17	「イエス乎ノー乎」	『大阪朝日新聞』
	6.1	「精神的活力ト年齢」	『経済論叢』4巻6号
	6.10	「遺伝と教育」	『大阪朝日新聞』
	7.1	「ゼー・エス・ミルとテローア夫人との関係」	『新小説』22年8号
	8.1	「純粋資本（資金）ト資本財トノ差別及ビ関係ヲ論ジテ諸家ノ批評ニ答フ」	『経済論叢』5巻2号
	8.8~8.14	「指数上の物価騰貴と実際上の生活難」	『大阪朝日新聞』
	9.1	「あだむ・すみす伝拾遺」	『経済論叢』5巻3号
	9.1	「遺伝と教育」	『朝日講演集』2輯
	9.1	「米国ニ於ケル婦人ノ職業」	『経済論叢』5巻3号
	9.1	「書簡集」	『大学評論』1巻9号
	9.1	「物価騰貴と家庭教育」	『婦人之友社』11巻9号
	9.10	「フィシャー、フィクス共編（河上肇訳）『如何に生活すべき乎』」〔訳者序言〕	弘文堂書房
	9.29	「荒木総長の訓示」	『大阪朝日新聞』『社説』
	9.30~10.17	「マルクスの『資本論』」	『大阪朝日新聞』
	10.1~1918.2.1	「物価変動ノ原因」	『経済論叢』5巻4・5号、6巻1・2号
	10.1	「民本主義とは何ぞや」	『東方時論』2巻10号
	11.1	「金地金ノ価格騰貴ニ就テ」	『経済論叢』5巻5号
1918	1.1	「マルクスの『資本論』に就て」	『史林』3巻1号
	1.14~1.17	「未決監」	『大阪朝日新聞』
	2.1	「物価調節ノ必要」〔抄訳〕	『経済論叢』6巻2号
	2.4	「不惑録」第一巻	未発表ノート
	2.6~2.7	「正統なる暴利取締」	『大阪朝日新聞』
	5.1	「生産政策カ分配政策カ」	『経済論叢』第6巻第5号
	5.20	「ラスキン著（石田憲次訳）『此の後至者にも』への序」	弘文堂書房
	6.1	「教育と遺伝」	『中外』2巻7号
	6.15	「ラスキン私抄（一）」〔抄訳〕	『法経論叢』13号
	7.1	「剰余価格ノ成立」	『経済論叢』7巻1号
	8.1	「滝本博士に就て知れることども」	『大学及大学生』10号
	8.6	「マルクスの社会主義の理論的体系」〔講演〕	
	8.18~8.24	「米価問題所見」	『大阪朝日新聞』
	9.1	「マルクス批評家の一模型」	『中央公論』33巻9号
	9.1	「読書法に就て」	『雄弁』9巻10号
	9.1	「丁抹国ノ社会主義」	『経済論叢』7巻3号
	9.10	『社会問題管見』〔初版〕	弘文堂書房
	10.1	「独逸の戦時社会主義」〔抄訳〕	『経済論叢』7巻4号
	?	「小田頼造君の思ひ出」	『精神運動』7号
1919	1.1	「或医者の独語」	『大阪毎日新聞』
	1.1	「『新しき村』の計画に就て」	『政治学経済学論叢』1巻1号
	1.1	「生産政策としての社会主義」	『経済論叢』8巻1号
	1.1	「吾々は要求しなければならぬ」	『新神戸』6号
	1.15~2.20	「社会問題雑話」	『新神戸』7・8号
	1.20	「『社会問題研究』発刊の序」	『社会問題研究』1冊
	1.20	「思索の必要と研究の態度」	『社会問題研究』1冊
	1.20~11.20	「マルクスの社会主義の理論的体系」	『社会問題研究』1~10冊
	2.1	「上より授かると下より取るとの相違」	『日本一』5巻2号
	2.1	「労働運動の使命」	『東方時論』4巻2号

	2.15	「断片〔一〕」	『社会問題研究』2冊
	2.15～5.1	『「一社会主義者の観たる世界大戦の真因」』（抄訳）、 「訳者序言」、「訳者付言」	『社会問題研究』2・3・5冊
	3.15	「断片〔二〕」	『社会問題研究』3冊
	3.15	「日満農家の生活比較」	『経済論叢』8巻3号
	3.15	「マルクスの唯物史観」	『社会及国体研究録』1巻1号
	4.1	「社会主義者としてのゼー・エス・ミル」	『経済論叢』8巻4号
	4.4	「カアル・マルクス原著『労働と資本』」（翻訳）、 「訳者序言」	弘文堂書房 『社会問題研究』4号
	5.1	「社会主義の進化」	『社会問題研究』5冊
	5.1	「ミルと労働問題」	『経済論叢』8巻5号
	5.10	「貧乏物語」[30版] 絶版	
	6.1	「社会運動と宗教運動」	『社会問題研究』6冊
	6.1	「利己主義と利他主義」	『社会問題研究』6冊
	7.1	「マルクスの唯物史観に所謂生産の意義」	『経済論叢』9巻1号
	7.15	「可変の道徳と不変の道徳」	『社会問題研究』7冊
	7.15	『「マルクス資本論解説」』	『社会問題研究』7冊
	9.8	「断片〔三〕」	『社会問題研究』8冊
	9.8	「読者諸君へ」	『社会問題研究』8冊
	10.15	「マルクスの唯物史観に関する一考察」	『経済論叢』9巻4号
	10.15	「福田博士の社会民主主義を評す」	『社会問題研究』9冊
	10.15	「資本家の思索の一例」	『社会問題研究』9冊
	11.1	「同盟怠業の道徳的批判に就て」	『経済論叢』9巻5号
	11.1	「エドウィン・キャナン著（伊藤雅雄訳）『富』への序」	弘文堂書房
	11.20	「断片〔四〕」	『社会問題研究』10冊
	11.20	「松浦氏『全訳資本論』の批判」	『社会問題研究』10冊
	12.15	「唯物史観と理想主義」	『社会問題研究』11冊
	12.15	「唯物史観と個人の努力」（抄訳）	『社会問題研究』11冊
	12.15～1920.3.5	「カアル・カウツキー『社会主義と各種階級の人々』」（抄訳）	『社会問題研究』11・13冊
1920	1.1	「社会問題管見」[20版] 絶版	
	1.15	「人道的理想と自然的法則との背理及び偕調」	『社会問題研究』12冊
	1.26	「森戸助教授の休職に就て」	『大阪毎日新聞』
	2.1	「資本論に見はれたる唯物史観」	『経済論叢』10巻2号
	3.5	「書簡一通（森戸君の筆稿に就て）」	『社会問題研究』13冊
	3.5～4.5	「ツガン・バラノウスキー『社会主義の本質及び目的』」（抄訳）、 「訳者序言」	『社会問題研究』13・14冊
	3.3	「改版社会問題管見序」[未刊行]	弘文堂書房
	4.1	「改版社会問題管見」	弘文堂書房
	4.5～1921.11.13	「ロバート・オウエン（彼の人物、思想、及び事業）」	『社会問題研究』14～27冊
	4.5	「言葉の上の一致はつまらぬものだ」	『社会問題研究』14冊
	4.10	「近世経済思想史論」[初版]	岩波書店
	5.1	「書簡一通」	『我等』2巻号
	5.5	「因果律と精神生活」（翻訳）	『社会問題研究』15冊
	5.5	「脳みその問題」（翻訳）	『社会問題研究』15冊
	6.1	「『共産党宣言』に見はれたる唯物史観」	『社会問題研究』16冊
	7.1	「科学的な社会主義と唯物史観」（翻訳）、 「訳者序言」、「訳者追記」	『社会問題研究』17冊
	8.5	「バラノイヤと自分」	日本精神医学会
	9.1	「社会主義と唯物史観と倫理学」（抄訳）	『社会問題研究』19冊
	9.1	「断片」	『我等』2巻9号
	10. 1	「三種の『資本論』邦訳」	『経済論叢』11巻4号
	11. 1	「或日の問答〔一〕」	『我等』2巻11号
	11. 1	「人間の自己撞着性」	『社会問題研究』20冊
	11. 1	「読者諸君へ」	『社会問題研究』20冊

（主に河上 [1982-86] 『河上肇全集』9～12、別巻より。文学関連の著作やアンケート調査の回答などのものは除いた。また著作の重複は初出のものを掲載した。なお1916年9月から『大阪朝日新聞』に掲載された「貧乏物語」の掲載開始日に関して、『河上肇全集』他多くの書籍において11日と12日の食い違いが生じているが、ここでは新聞に従い12日とした。この点について本稿末の【付記】を参照。）



最初ブルジョア経済学にかちりついてゐた私は、どうしてもそれに満足することが出来なくなつたので、ずつと遅れてから、恐る恐る『資本論』に近づくやうになった。(河上 [1985]『河上肇全集』続5、209 ページ。)

実際私は、ほぼ五十歳頃に、経済学の領域では、最初の出発点である純然たるブルジョア経済学から、その反対物たるマルクス主義経済学への、完全なる転化を実現し、哲学の領域では、宗教といふ神秘の雲霧に覆はれた、最初の出発的たる唯心論から、その反対物たる徹底的な唯物論への、完全なる転化を実現しえたのである。(同上、231 ページ。)

そしてその転化していく時期に関して、その 『自叙伝』では、

『エコノミスト』の逸名筆者は、[河上肇に関して]「マルキストらしい色彩の現はれ出したのは、大正八年 [1919 年] 創刊の『社会問題研究』以後のことである。だが、この時代の氏のマルキシズムに関する見解は、後年氏自らによって、その重要部分が抹殺された如く、大甘ものであった。」と云つてゐるが、やはりこれが正しいであらう。大正八年 [1919 年] の一月から私の個人雑誌『社会問題研究』を出すやうになったのは、恐らくその頃、真理の方向はここにあるという見込みをつけ、分からぬつもりなりにもマルクス主義を宣伝しようと決心するに至ったからであらう。『資本論』に嚙りつくようになったのも、大体その頃ではないかと思はれる。(同上、235～236 ページ。)

この有名な『自叙伝』とは別に、『河上肇全集』 少し長文になるが引用していく。これは 1920 年の編纂で明らかにされた未刊行史料には、次の 年 3 月 3 日時点での河上肇自身の言明である。ようにある。本稿の内容上非常に重要なので、

大正五年 [1916 年] の秋から冬にかけて、私が『朝日』にかの物語 [『貧乏物語』] を連載してゐた頃は、思想界の様子は今とは余程違つてゐた。当時私は、一九四〇\*年を俟たずして世界に一大革命起るべし、という一学者の言を引いて、物語の筆を起したのであつたが、実は翌年 [1917 年] に露西亜であのような大革命が起らうとは、私の全く予期しなかつた所である。しかし露西亜には革命が起り、次いで独逸にも革命が起り、思ひ設けざる形に於て、世界戦争は其局を結ぶことゝ爲つた。此の如き時勢の変が、『貧乏物語』の著者に少なからぬ影響を与へ、今も猶与へつゝあることは、筆者自ら能く意識する所であるが、しかし斯かる影響の波動は、独り書齋裡に於ける一学窮に及んだのみではなくて、広く社会各階級の全般に及んだやうである。只今 [1920 年] から大正五年 [1916 年] の秋を顧みると、殆ど隔世の感がないでもない。

現に私が『朝日』にかの物語 [1916 年連載の『貧乏物語』] を連載し、十一月の中旬に其下篇に入つて、経済組織改造のことを述べかけた時、私は左程までの心配をせずに、社会主義という言葉を使つて何事かを書き始めたのであるが、その第一回分はゲラ刷にされたまゝ、当時の『朝日』の編輯長たりし鳥居素川君から、送り返された。それには一には、新聞紙が無用の誤解を受けても困るという心配からでもあつたらうが、主としては、筆者が不慮の筆禍を蒙つては気の毒だといふ同君からの親切であつた、と私は考える。さう云う時代であつたから、私は経済組織の改造に就ては、思ふ所を十分に述べ得なかつた事情が無いではなかつたが、しかし私は、嘗て山川均君が批評され

ていたやうに、当時は組織改造と人心改造との二頭立ての馬車を駆つて居たのであるから、組織改造の赤馬の方には可なり手綱を弛めて仕舞つても、人心改造の白馬をば思ふ存分に鞭うつことによつて、此物語の結論に達することが出来た。けれども今日になつて見ると、其結果は、車を右へ〔右へ〕と曲げて仕舞つて、本通りをずっと外れたやうである。私は之より先き十数年前の明治三十八年〔1905年〕に、偶然にも同じやうに九\*月から十二月にかけて、「社会主義評論」と題する物語を『読売新聞』に載せたことがあるが、其時も結末は人心改造論に落ちて仕舞つた。兎角さう云う所へ落ちたがるのが、堺利彦君の批評されたる如く、私の「抜き難き人道主義の病」なのであろう。

けれども『貧乏物語』を書き終えてから、一正確に言へば、世界の大戦が極頂に近づくにつれて、一世界には様々の事件が起るやうになり、又日本の思想界にも、僅かの間に、急激なる変化が起つたやうに思へた。其外様々の出来事―『貧乏物語』に対する親切なる諸家の批評、〔中略〕―が、私に有益なる刺激を与へたので、私は自分の思想に向つて、多少宛の自家批評を加へることが出来た。さうして朦朧ながらも、私は或種の新たなる道に出口を見出すことができた。其結果、組織改造の赤馬と人心改造の白馬とが全く一匹の馬に融合して仕舞つて、之ならば転覆することなしに、大道を走ることが出来やうか、と思ふやうになつた。そこで私は、大正八年〔1919年〕の一月に『社会問題研究』の第一冊を公にし、それに引続き毎月又は隔月に、其続篇を公にする計画を立てた。私は一切の新聞雑誌から離れて、自分独りで此孤城に立て籠らうと決心した。『或医者の独語』といふ随筆は、即ち其時の作である。』（「改版社会問題管見序」1920年3月3日、河上〔1982〕『河上肇全集』10、521～523ページ。原文には\*の箇所注があるが省略した。）

このように河上肇自身が、（上記の文章では「或種の新たなる道に出口を見出す」、「組織改造の赤馬と人心改造の白馬とが全く一匹の馬に融合して」、「自分独りで此孤城に立て籠らう」と表現されている）マルクス経済学者へと旋回していくのは、1919年の『社会問題研究』を刊行した頃と、自ら語っているのである。これが河上肇マルクス経済学者転身1919年説の、第一の根拠である。

そしてさらにこの通説1919年説を裏付けるべく、河上肇の著作はこの1919年を境にして、この1919年から著しくマルクス主義的色彩を帯びてくるのである。（この点に関しては以下で詳述。）これが河上肇マルクス経済学者転身1919年説の、第二の根拠である。

### 事実経過

さてここでこうした時期確定に関して、著作と出版の前後関係から、上記の引用の内容と絡

めて、もう少し事実経過を詳しく確認していった方がよい。それは以下のとおりである。（上記著作年表を合わせて参照。）

まず有名な『貧乏物語』であるが、これは内容からして突如出版された著作ではなくて、内容上下敷きとなるべきものがあり、1916年4月の「奢侈ト貧困」がベースになっている。この「奢侈ト貧困」の中で河上肇は、現在の貧乏・困窮状態を改善するためには富裕層が自ら奢侈を抑えるか廃止すること、それが無理なら国権による経済組織の根本的改造が重要、およそこのように主張した。この前半の主張が先の「人心改造の白馬」で、後半の主張が「組織改造の赤馬」に例えられているわけである。ただその後半の主張はマルクス主義的な色彩をかなり帯びているとしても、一方の前半のものはマルクス主義的な視点や内容とは著しくかけ離れているところである。

しかしこうした主張と内容は『貧乏物語』へ

と通底しながら、発展され展開されていった。その著作・著述順を見ていくとすれば、1916年9月に『大阪朝日新聞』に「貧乏物語」としての連載が始まり、これがかなりのヒットとなり、さらに翌1917年3月に『貧乏物語』として一冊の本として刊行されたのである。これもかなりの売れ行きとなった。

ただ「奢侈ト貧困」（1916年4月）から『貧乏物語』（1917年3月）の上記の内容に関しては、時の専門家、特にマルクス主義関係者から手痛い批評と批判を受けることとなった。しかしその批評と批判が、結果として後のマルクス経済学者としての河上肇の形成に大きな影響を与えることとなったのであるが。その中でも大きな影響や感化を与えることとなった重要な批評としては、櫛田民蔵、山川均、そして堺利彦などの批評が挙げられる。

それらを確認していくとすれば、当時河上肇の弟子でもあった新進気鋭の櫛田民蔵は、「奢侈ト貧困」に対して早くから批評を起こした。そしてそれに対して河上肇が答え、また櫛田民蔵がさらにその答えにも賛成できない旨の論文を出している<sup>(5)</sup>。またマルクス主義研究と社会主義者としての先達であった山川均や堺利彦は、『貧乏物語』あたりの河上肇に関して、二面性が常にまとわれていると批判した。と言うのは、社会主義者あるいは唯物論者としての山川・堺からすれば、河上肇の主張には人心改造の面と社会組織の改造の両面があって、前者に挙げられた人心改造の面とは、心を悔い改めなければならないかのような宗教・道徳的見地から河上肇は抜き切れておらず、両面がこんがらがっているという批判である<sup>(6)</sup>。（上記の回想にあるような、「当時は組織改造と人心改造との二頭立ての馬車を駆つて居た」とか、「結末は人心改造論に落ちて仕舞つた。兎角さう云う所へ落ちたがるのが、堺利彦君の批評されたる如く、私の『抜き難き人道主義の病』なのであ

ろう」とあるのは、これらのことを指している。）

しかし河上肇自身が回顧していたように、『貧乏物語』を刊行（1917年3月）の後、ロシアで社会主義革命が起き、1918年7月から日本では米騒動が起き、また同年11月にドイツでも革命が起き、『貧乏物語』を書き終えてから、—正確に言へば、世界の大戦が極頂に近づくにつれて、—世界には様々の事件が起るやうになり、又日本の思想界にも、僅かの間に、急激なる変化が起つたやう」であった。その変化と影響は、「独り書齋裡に於ける一学窮に及んだのみではなくて、広く社会各階級の全般に及んだやうで」ある。

こうした世界的また社会的な事件が起き、また河上肇自身に対する上記のようなかねてからあるいは当時期の批判等々によって、河上肇は脱皮していく。つまりマルクス経済学者へとの転身・旋回である。これを、上記の回想では「私は或種の新たな道に出口を見出すことができた。其結果、組織改造の赤馬と人心改造の白馬とが全く一匹の馬に融合して仕舞つて、之ならば転覆することなしに、大道を走ることが出来やうか、と思ふやうになつた」と、このように表現しているのである。そして、本稿で問題としているマルクス経済へその道を見出していく河上肇の転身・旋回の時期的な確定であるが、上記の引用文に明確に示されていたように、それは1919年1月から刊行されていく『社会問題研究』発刊の頃というわけである。

そして、河上肇自身の手によって発刊されて刊行されていった『社会問題研究』の誌上の論文で、あるいはさらに既述の河上肇著作年表からも確認できるのだが、この1919年を境に、（1919年以前にもマルクスに触れたものは当然あるが〔後に詳述〕、）量的・質的に河上肇の研究・論文は、著しくマルクス主義的な内容になっていくのである。（この点についても後に詳述。）

以上ここまでの整理しとめてみれば、第一に河上肇自身による言明と回顧、そして第二に河上肇の著作の内容からして、1910年代の後半から河上肇はマルクス経済学の研究を積極的に行ない、1919年からの著作をもってマルクス経済学への傾斜と旋回が見られる。およそそのような把握が通説としてなされているところである。

問題を明らかにするためには、われわれはどうしても一たん『自叙伝』の外に出なければならず、そこから改めて『自叙伝』の記述を眺め直してみなければならないのである。」（小林 [1994] 37～38 ページ。）

『自叙伝』では、「ブルジョア経済学に見切りをつけ、腰を据えてマルクス主義経済学の勉強を始め」たのは、雑誌『社会問題研究』を創刊した頃であると回想している\*が、実際には、それより二・三年ほど遅い、一九二二年の頃であると、考えざるを得ないことが判るであろう。彼がマルクス経済学の立場に立ったことを示す論稿「福田博士の『資本増殖の理法』を評す」を著したのは、一九二二（大正一一）年春から夏にかけてのことだからである。したがってこの点からいうならば、雑誌『研究』「を出すやうになったのは、恐らくその頃、真理の方向はここにあるという見込みをつけ、分からぬなりにマルクス主義を宣伝しやうと決心するに至ったからである\*」という『自叙伝』の回想は、どうしても彼の思い違いといわざるを得ないのである。（小林 [1994] 213 ページ、原文には\*の箇所注があるが省略した。）

以下本稿でこの二つの見解を筆者（深澤）自身の視点で検討していく。

### ③河上肇のマルクスに関する研究

筆者（深澤）の本稿での結論から示していくとすれば、筆者（深澤）はやはり通説としての1919年説を支持する。その理由としては、まず①で示しきれなかったが、河上肇の研究内容とそこでの主張が1919年を境にして、著しくマルクス主義的なものに傾斜している点であ

### ②通説に対する異論

しかし近年、こうした通説としての1919年説に対して、本稿で最初に取り上げた小林 [1994] から異論が示されている。小林 [1994] は何しろ河上肇の『自叙伝』による『『告白』と軌跡のズレ』（小林 [1994] 32 ページ）を指摘し、つまり河上肇の『自叙伝』による回想は河上肇本人の思い違いであると主張する。

例えば小林 [1994] は、次のように主張する。

る。この詳細を河上肇の著作を年代的に追って、具体的に見ていくこととする。（本稿 73 ページ以降に掲げた著作年表を合わせて参照。）

### 河上肇によるマルクス経済学・マルクス主義研究

まず1916年の『貧乏物語』刊行以前に、河上肇のマルクス経済学・マルクス主義に関係した主なものとしては、以下のとおりである。

「セーグリマン教授の『歴史の経済的説明』」『史学雑誌』15 編 8 号、1904 年 8 月。

『社会主義評論』読売新聞社、1906 年 1 月。

「ダルキンを憶ふ」『日本経済新誌』5 巻 6 号、1909 年 6 月。

「社会主義論」『日本経済雑誌』2 巻 4・5・6 号、1907 年 11 月～12 月。



「エンゲルスと唯物史観」(ウォルトマン著『唯物史観』1900 年の抄訳)『国家学会雑誌』24 巻 2 号、1910 年 1 月。

「ダーウキニズムとマルクス主義—進化論と社会主義—」『中央公論』27 巻 4 号、1912 年 4 月。

「唯物史観二就イテ関博士ニ答フ」『国民経済雑誌』12 巻 4 号、1912 年 4 月。

「唯物史観の立脚点」『国民経済雑誌』12 巻 4 号、1912 年 7・8 月。

「経済的唯物史観ヲ論ズ」『京都法学会雑誌』8 巻 6・8・10・11 号、1913 年 6・8・10・11 月。

このように 1912~13 年頃に、マルクス主義の中でも唯物史観に関する研究が集中して見られるものの、以下と比較すれば彼のマルクス主義研究は散発的と言えるくらいのものである。

しかしこの後、1910 年代の後半になってくると、かなりマルクス経済学・マルクス主義関連研究のものが多くなってくる。

「マルクスの『資本論』」1917 年 10 月。これはマルクスに関する伝記である。

「剰余価値ノ成立」1918 年 7 月。マルクス経済学の剰余理論に関する研究であり、表題でも明らかに、この当時の河上肇のマルクス経済学の理解は価値と価格との区別が明らかではない<sup>(7)</sup>。

「マルクスの社会主義の理論的体系」の講演、1918 年 8 月。後に以下に示す「マルクスの社会主義の理論的体系」『社会問題研究』1 冊(1919 年 1 月)として刊行。当時のマルクス経済学研究としては、かなりの高水準である。唯物史観から始まり、労働価値説、剰余価値論、資本主義の崩壊論までを論じている。上で示した価値と価格の区別は、ここでは峻別されている。ただこうした内容に関して、河上肇がどの文献から摂取したのかは明らかでない。

「マルクス批評家の一模型」1818 年 9 月。これはマルクスを批判した北畠吉に対する反批判である。

そしてさらに対象となっている 1919 年に入ると、次のとおり一段とマルクス主義的色彩を帯びようになる。

「生産政策としての社会主義」1919 年 1 月。

『社会問題研究』1 冊～、1919 年 1 月～。

「マルクスの社会主義の理論的体系」1919 年 1 月～。既述の 1918 年 8 月の講演がもとであり、繰り返すが、当時のマルクス経済学研究としては、かなりの高水準である。唯物史観から始まり、労働価値説、剰余価値論、資本主義の崩壊論までを論じている。上で示した価値と価格の区別はここでは峻別されている。

「マルクスの唯物史観」1919 年 3 月。

『カール・マルクス原著「労働と資本」』(翻訳)、『「労働と資本」訳者序言』1919 年 4 月。

「マルクスの唯物史観に所謂生産の意義」1919 年 7 月。

『「マルクス資本論解説」』1919 年 7 月。この著作は、高島素之『マルクス資本論解説』(カウツキー『カール・マルクスの経済学説』の訳)に対して、不満を述べ、不十分性を指摘している。

「マルクスの唯物史観に関する一考察」1919年10月。

「松浦氏『全訳資本論』の批判」1919年11月。松浦要が1919年9月に訳した『資本論』に対して、早速誤訳等々を指摘したものである。

「唯物史観と理想主義」1919年12月。

「唯物史観と個人の努力」（抄訳）1919年12月。

見られるように河上肇にあっては、1910年代後半からマルクス主義・マルクス経済学関連の研究内容が多くなり、1918年8月の講演と1919年1月刊行の「マルクスの社会主義の理論的体系」に見られるとおり、研究成果が活かされているものや、この1919年になると研究と内容が非常にマルクス主義・マルクス経済学的なものになってくるのである。つまり1910年代の後半に河上肇はマルクス主義・マルクス経済学に興味関心を寄せ、自身の研究対象とし、1919年に積極的にその成果を公表し出していることが解る。

幸徳秋水・堺利彦訳「共産党宣言」『平民新聞』1904年。

堺利彦訳「空想から科学への社会主義の発展」『社会主義研究』第4号、1906年。

山川均「マルクスの『資本論』」（部分訳）『大阪平民新聞』1907年。

安部磯雄「資本論」（部分訳）『社会新聞』1909年。

これらの著作を河上肇が読んだかどうかは、ひとまず定かではない。注意することは、山川[1907]や安部[1909]ではマルクス経済学で特徴的な価値と価格の区別がすでになされていたのではあるが、上記示したように河上肇の理解では1918年7月の「剰余価格ノ成立」では価値と価格との区別が明らかではない。このため山川[1907]や安部[1909]などの文献には当たってなかったのではないかと推測される。

河上肇訳『労働と資本』弘文堂書房、1919年4月。

高島素之訳（カウツキー原著）『マルクス資本論詳説』売文社出版部、1919年5月。

松浦要訳『全訳資本論』（部分訳）経済社出版部、1919年9月。

### 河上肇による資本論研究

筆者（深澤）の既述の論定にさらに決定的なのは、河上肇の資本論研究の内容である。まず河上肇は、1909年に初めて『資本論』の英訳（ムーアとエイヴリングによるもの）を入手し、その後エンゲルス版のドイツ語の原典を入手し、しばらくそれを利用した後、1921年以降になるとカウツキー版を利用している。（河上[[1982]『河上肇全集』9、525ページ。）

ここで河上肇とは別に、日本における1910年までの『資本論』研究や、マルクス主義の翻訳に関して確認しておく、以下のとおりである<sup>(8)</sup>。

しかし同じく上記示したように、同年の翌月の8月からは、価値と価格との区別が明らかに示されているのである<sup>(9)</sup>。これらの事実によって、この時期の河上肇のマルクス経済学あるいは資本論研究の度合いのほどが知れるのである。

さらに上記に続いて1910年以降、日本における『資本論』の翻訳作業と、マルクス主義の文献に関する翻訳に関しては、以下のとおりである<sup>(10)</sup>。

松浦要訳『価値価格及び利潤』経済社出版部、1919年10月。

山川均『マルクス資本論大綱』東京三田書房、1919年11月。

生田長江訳『資本論』（部分訳）緑葉社、1919年12月。

高島素之訳『資本論』第一巻 第一冊「マルクス全集」第一冊、大鐘閣、1920年6月。

既述のとおり、1910年代の後半に河上肇はマルクス主義・マルクス経済学に興味関心を寄せ、自身の研究対象とし、1919年に積極的にその成果を公表し出している、という筆者（深澤）の論定にとってさらに決定的なのは、1919年になると他者が行なったマルクスの資本論解説に対して河上肇は不満を述べている点や、さらには翻訳された『資本論』に河上肇自身がその訳に関してマルクスの『資本論』の原典とさらに英語版とも対照させて、特に松浦訳の誤訳を批判している点である。既述の「『マルクス資本論解説』（1919年7月）、「松浦氏『全訳資本論』の批判」（1919年11月）が、それである。この事実経過は見過すことはできない。

つまり明らかにこの時期、河上肇は『資本論』の原典を含めた研究を行っており、その研究成果を示しているのである。1919年を境に河上肇がマルクス経済学に傾倒し旋回していったという事実は明確である<sup>(11)</sup>。

よってここまですべてをまとめると、河上肇は今までおぼろげに知るしかなかったマルクスの社会主義の理論的体系について、恐らくは1918年の中頃（1918年8月「マルクスの社会主義の理論的体系」の講演のあたり）に詳しい内容を知り、そこから詳細な研究を開始し、1919年から数々の著作を刊行すると同時にマルクス主義に傾倒し旋回していったと言えるのである。

#### ④小林[1994]の異論に関して

ここで今まで取り上げてきた小林[1994]に再度立ち帰りたい。本稿②でも示したように、

小林[1994]では河上肇のマルクス経済学への旋回に対して、通説としての1919年説に異論を示していたわけである。その小林[1994]においても、本稿で示したような河上肇の著作と研究の内容を深く読み込み掘り下げ、その著作遍歴や研究内容を様々な角度から検討している。この小林[1994]による河上肇の著作研究の内容分析は非常に多岐にわたり膨大であり、本小稿でその全容を示すことは到底できない。本稿執筆にあたり、筆者（深澤）も大いに参考になったことは当然である。

ただ、河上肇に関する小林氏の著作研究の内容分析は、本稿ここまでの論定で明らかのように、本稿による解釈とかなり違っているわけである。本小稿のオリジナリティーをあえて示しておくとするれば、小林[1994]との違いやあるいは筆者（深澤）による解釈などを、本稿で示しているものと受け止めてもらいたい。

さらに紙幅の許す限りで小林[1994]に対してもう一点、重要な点を申し上げておくとするれば、上記のような小林氏と深澤の分析や解釈の相違に関して、そうした相違が生じる根本的要因があると考えられる。それは次のとおりである。筆者（深澤）は河上肇がマルクス経済学に傾倒し旋回していくその時期を探り、それを上記のように捉えているところであった。対して小林氏が追究した重要な点は、河上肇が従来の経済学を微塵もなく捨て去り、いわば葬り去り、完全にマルクス経済学のみを用いていく時期を探り、それを本稿78ページ以下のように示しているものと考えられる。これが河上肇の著作遍歴や研究内容の分析や解釈に相違を示す、両者の根本的要因ではないだろうか。

これを確認した上で、さらに次のように付言することができる。小林氏の主張するように、確かに河上肇には通説となっている1919年以降においても、過去に捨て去ったかのように見えた過去の経済学分析の手法や、脱皮してよいはずの人心主義的な立場、これらを河上肇は引きずっているところが確かに見受けられる。ただし、そうした過去の影響なり残滓・残存物は、新なるものに傾倒していく際に、あたかも一夜にして微塵もなく雲散霧消させ放擲し、利用しなくなるという類のものでもないはずである。河上肇にとって、過去に捨て去ったかのように見えた以前の経済学分析の手法や、脱皮したはずの人心改良主義的な立場、これらが1919年以降たとえ幾分見え隠れするといえども、1919年を境にして上記③で示してきたように、明らかにマルクス主義的な研究と著作に入っていることは疑いや紛れもない事実であり、やはりこの1919年は河上肇にとって大きな旋回・転換の年であり、河上肇のマルクス経済学への傾斜はこの1919年説に求められる。このように筆者（深澤）は考え、通説を支持する次第である。

### 3. 河上肇のマルクス経済学への転身その要因に関して

#### ①転身の要因

本稿ではこのように河上肇のマルクス経済学への旋回と傾斜時期を、通説に従い1919年に求めたのであるが、本稿で扱う対象課題として次の問題がまだ残されている。それは、一体なぜ彼がマルクス経済学に駆られたのか、当時の「ブルジョア経済学」のどこに満足できなかったのか、マルクス経済学のいかなる要素が彼を引き付けたのか、これらの問題であった。以下ではこの点に関して追究していくこととする。

上記の問題に関して、この時期の河上肇の著

作を検討した結果、結論から示していくとすれば、筆者は以下のように捉えている。それは一言で言えば別名「科学的社会主義」と称するマルクス主義の体系であり、具体的には社会主義建設に関してマルクス主義に特長的な資本主義経済の分析と同時に主張された社会主義移行への論理、これらである。そしてこれらを具現化した代表するものとして、特に唯物史観の観点と論理に河上肇は着目あるいは引き付けられたと、このように筆者は捉えている<sup>(12)</sup>。この点のさらなる詳細に関して、付加していくとすれば以下のとおりである。

まずマルクス主義の体系性についてだが、マルクス主義は現状の資本主義経済に関して、『資本論』に代表されるようなマルクス経済学的視点を活かした分析を重視する。そのマルクス経済学的視点を活かした分析とは、単なる事実の羅列や現状の単なる状況説明に終始するものではない。そこでの特徴・特長の一つとして、弁証法的な観点を併合して事物を運動体のように捉え、現行かくある諸問題はいかに変化・発展して来たのかという因果関係やプロセスの解明に重きをおく。そこで現状いかなる矛盾や問題を抱え、それがどのような展開を見せるのかといった、およそこのような視点と分析手法を組み込み用いていく。

この視点や分析手法はまた同時に、広くは唯物史観（史的唯物論）の観点に共通するものであって、現在の資本主義経済を過去あった体制と同様歴史的に一過性のものとして把握する。そこではこの資本主義経済という体制にあっても、止揚しきれていない新たな矛盾や問題が発生しかつ展開しており、そうした問題や矛盾の対立・軋轢あるいは相克や葛藤、これらのプロセスを経ながら新たなものへと事物は変化し、この資本主義経済という体制も必然的に変化し発展していくものと捉えられるのであって、このような視点を重視するものである。こうした



唯物史観の観点から、資本主義経済に関しては上で述べたマルクス経済学的分析が符合し採られていくところである<sup>(13)</sup>。

分析手法の詳細はここではおくとして、マルクス主義ではこのように現在の資本主義経済を過去あった体制と同様、歴史的・一過性のものとして把握するため、この資本主義経済の後にあるべき経済と社会体制を、彼岸の如く想定する場合もある。多くはそれを（かつてのソビエト型を採るかどうかはおくとして）社会主義に見、あるいはそれを必然的なものとして期待した場合もある。さらにその観点と過程がまた生物の進化の如く、つまりダーウィンの進化論の如く（そして以下見るような「科学」としても）なぞらえられている。

以上のように資本主義経済という体制が有する限界性、そしてそれを抉り出す分析、そして新たな経済制度への胎動と同時にそれを当時社会主義に見たことから追求される社会主義建設の論理、これらがマルクス主義に内包されており、それらに既述の唯物史観の論理とさらには階級闘争の理論が組み込まれながら、それらを包含しながらマルクス主義という壮大な体系が形成されている。このように構築された体系性と同時に既述の資本主義経済への分析、これらを併せ持ってマルクス主義は一名科学的社會主義とも呼ばれるところである。と言うのも、マルクスの以前にあったロバート・オーウェンなどの社会主義を空想的社會主義として、そこには科学的分析が欠如していたと捉え、それと対

比する形で、マルクス主義の中の上記の各論とまたそれらを総合連関的に構成された壮大な体系、これをもって科学的社會主義とも主張しているからである。

これらは確かにマルクス主義特有のものであり、いわゆる「ブルジョア経済学」はもとより他の経済学にはない固有のものであって、それはまさにマルクス主義の特徴あるいは特長でもある。これらの観点と論理に河上肇は着目あるいは引き付けられたと、このように筆者は捉えている。

## ②その根拠

そしてその根拠としては、この時期の河上肇の著作を検討してみると、こうしたマルクス主義の観点と論理に関する言及・主張・強調が、やはり通説としての1919年から、急激にそして非常に多くなっており、いわゆる質・量ともに増していることが挙げられる。それを詳しく示していくとすれば以下のとおりであって、前項で指摘した点、つまり河上肇は今までおぼろげに知るしかなかったマルクスの社会主義の理論的体系について1918年中頃に詳しい内容を知り、そこから詳細な研究を開始し、1919年から数々の著作を刊行すると同時にマルクス主義に傾倒していった、このことが以下でも改めて確認できる。それについてまた河上肇の当時の著作から確認していくとすれば以下のとおりである。（本稿73ページ以降に掲げた著作年表を同時に参照。）

「或医者の独語」1919年1月。暗喩的な表現をもって社会を患者に例え、医学の中でも外科手術すなわち階級闘争や社会革命の必要性を説いている<sup>(14)</sup>。（「吾々は要求しなければならぬ」1919年1月、「社会問題雑話」1919年1・2月、「『社会問題研究』発刊の序」1919年1月、「上より授かると下より取るとの相違」1919年2月、「労働運動の使命」1919年2月でもほぼ同様の主張。）

「『新しき村』の計画に就て」1919年1月。武者小路実篤の新しき村に関して、ロバート・オーウェンらの空想的社會主義と対比している。

「生産政策としての社会主義」1919年1月。科学的社会主義と唯物史観の公式を紹介している。

「マルクスの社会主義の理論的体系」1919年1～11月。1918年8月の講演を基に、空想的社会主義と科学的社会主義の対比、唯物史観の解説、階級闘争の解説、剰余価値論と合わせた労働価値説の解説、剰余価値取得の困難と資本主義崩壊とを合わせて社会主義という新組織実現の条件、これらを説いている。再度繰り返すが、当時のマルクス経済学研究としては、かなりの高水準である。価値と価格の区別はここでは峻別されている。ただこうした内容に関して、河上肇がどの文献から摂取したのかは明らかでない。

「マルクスの唯物史観」1919年3月。表題どおりマルクスの唯物史観の公式を解説している。

「社会主義の進化」1919年5月。空想的社会主義と科学的社会主義の違いを説き、社会主義の必勝を説いている。

「断片〔三〕」1919年9月。マルクスの唯物史観の必然論を訴えている。

「唯物史観と理想主義」1919年12月。唯物史観の優位性、マルクスの社会主義の科学性を主張している。

そしてこれらが後に、著書としての『近世経済思想史論』（1920年4月）の第三講 カール・マルクス（第一段 社会主義経済学の成立、第二段 唯物史観、第三段 資本主義的経済組織の批評、第四段 社会民主主義）へと進展し、まとめられ展開していくのである。

以上のように1919年から著しく（前項で見たマルクス経済学への傾斜と同時に、）唯物史観と科学的社会主義の理論を訴えるようになっていたのであって、（無論それ以外の著作も当然あるのではあるが、）河上肇のこれらへの傾注ぶりがこのように知られるのであって、彼が唯物史観と科学的社会主義そしてマルクス経済学の理論に駆り立てられている諸相は明らかである<sup>(15)</sup>。

### ③ロシア革命（1917年）の影響

最後にもう一つ問題として、ではなぜこの1918・19年の時期に河上肇はマルクス主義に傾倒し旋回していったのであろうか、こうした問題が残っている。すでに本稿でも確認しておいたように、早くは1904年の頃に唯物史観を知り、1906年に社会主義について評論を出し、その後1912年にマルクスについて触れた論文

を出していた河上肇にあって、なぜ1918年からマルクス主義の研究に傾斜し、1919年からその研究成果を出していったのか。逆に言えば、なぜ1918年以前にはマルクス主義に傾倒していかなかったのかという問題である。

これについては実際問題として様々な要因があると考ええる。一つには、河上肇にとって1918年以前に知ることができたマルクス主義に関しての資料的制限、あるいはまた本稿冒頭触れた河上肇自身も語っていたように日本における社会主義に関する弾圧、これらの諸要因も加味しなければならない。

ただ時期的に重要な点として、筆者はやはり1917年に起きたロシア革命の影響が大きかったと考える<sup>(16)</sup>。これが河上肇あるいは社会そして思想界に与えたインパクトはかなりのものがあつた。それは河上肇自身も語っていたとおりである（本稿75ページ～）。この他に彼自身からの言質を追求するとすれば、史料的に本稿で特に着目し依拠してきた彼の「マルクスの社会主義の理論的体系」の講演（1918年8月、後に「マルクスの社会主義の理論的体系」〔『社会問題研究』1冊、1919年1月〕として刊行）に、次のようにある。

私は今晚、マルクスの社会主義の理論的体系といふ題の下に、暫時の間、御話をする積りである。

今日私が此問題を選んだ理由は種々あるが、其第一理由は、近頃露西亞に革命が起つて、其がマルクス主義の影響だと称せられて居るが為である。露西亞ではマルクス主義に本く革命が起つたと称せられているのに、そのマルクス主義の何物たるやは、未だ我が国に於て広く且正しく知られて居らぬ。殊に近頃露国の廢帝を銃殺したなど、云ふ報道がある為に、斯かる事までマルクス主義と密接なる関係あるもの、如くに考へらるゝ傾向が、或は在るであらうと思ふが、此の如きは甚しき誤解であるから、其等の誤解を正し、時事問題の正当なる理解の為に、多少の参考材料を提供したいと云ふのが、私が此題目を選んだ第一の理由である。(河上 [1982]『河上肇全集』10、234 ページ。)

このように、ロシア革命が生じた後、それがマルクス主義とのどのような関係があり、世上言われるマルクス主義との関係との誤解、これらを見極め、同時にマルクス主義に関して正しい理解を行ないたいという、これらへの河上肇の熱意がこの文面からは読み取れるのである。上記示したように、ロシア革命の影響はマルクス主義との関係を探求するという課題として、当時の河上肇の思索に大きな影響を与えていたことは事実である。ロシア革命が河上肇にとってマルクス経済学に踏み込んでいく大きな要因だったことは間違いない。

## 総括

本稿を閉じるにあたって、結論あるいはまとめとして、以下のように総括できる。

まず河上肇には、貧乏の根治などを希求する社会主義への憧憬や下地ともいえる思想や思考があった<sup>(17)</sup>。それらをかつては社会改良的な立場と人心改良的な立場との両面から打ち出していた。そうした二面性は他者からの批判によって切磋琢磨されていった。加えて1917年のロシア革命による史上初の社会主義政権の樹立、それは河上肇にとって大きな影響を与え、かねておぼろげに知っていたマルクス主義についてその関心をさらに増すものであった。これによって1918年頃からマルクス主義の研究・探求に入り、特に科学的社会主義の理論と唯物史

観の理論に引かれそれに傾倒し、1919年以降彼はマルクス主義とマルクス経済学のさらなる研究へと入り、その成果を出していった。このようにして、彼のマルクス主義・マルクス経済学者への旋回は、通説としての1919年に求められる。

## 注

- (1) これに関して、深澤 [2018] 53・65 ページでは誤記があったので、以下のとおり訂正したい。「松浦要・山川均訳『賃金・価格および利潤』」を「松浦要訳『価値・価格および利潤』」に。この詳細に関しては、深澤 [2019] を参照。
- (2) この詳細に関しては、深澤 [2017] を参照。
- (3) 以下、小林 [1994] 41 ページ～。
- (4) こうした通説的見解の代表的なものとしては、吉田 [1959] 117 ページ～、大内 [1964] 27 ページ。なお河上肇研究史の整理として近年のものは、三田 [2003] 19 ページ～を参照。
- (5) 櫛田 [1978]『櫛田民蔵全集』第一巻 416 ページ～。河上 [1982]『河上肇全集』9、198 ページ～。
- (6) 山川 [1919]、堺 [1971]。
- (7) この著作に関して、1923年8月河上肇は次のように記している。

「剰余価格の成立」といふ一文は、私がマルクス以外の学派からマルクスに移らんとした最初の出発点における記念の作物である。それ以来、私はマルクスについて日々に学ぶに従うて益々彼の偉大さを感じつゝある。(河上 [1982]『河

上肇全集』13、474 ページ。)

これは筆者（深澤）らが支持する、通説としての 1919 年説の重要な根拠である。

- (8) 1910 年までの日本のマルクス『資本論』研究や、マルクス主義の翻訳に関しては、深澤 [2018] を参照。
- (9) この時期マルクス経済学でよく用いられるドイツ語の Value という語に関しても、当時はまだ価値と価格の区別が曖昧だったとよく言われている（日高ほか [1967] [上] 66 ページ）。しかし、本文でも述べたように、山川 [1907] や安部 [1909] ではすでに価値と価格の区別がなされている。しかし河上肇にあっては、「剰余価格ノ成立」（1918 年 7 月）では彼のマルクス経済学に対する理解は価値と価格との区別も明らかではなかったのであるが、その後「マルクスの社会主義の理論的体系」の講演（1918 年 8 月、後に「マルクスの社会主義の理論的体系」として『社会問題研究』1 冊 [1919 年 1 月] に収録）においては、価値と価格は峻別されているのである。
- (10) この時期の日本のマルクス『資本論』研究や、マルクス主義の翻訳に関しては、深澤 [2018] を参照。
- (11) この論定に関する明確な証左として、同時期の堺利彦は河上肇に対して以下のように言明している。

わたしはまず明らかに言う。福田博士の時代が過ぎて河上博士の時代が来た。大正八年 [1919 年] の前半は福田時代の全盛期で、河上時代の醗酵期だった。そしてその後半は河上時代の興隆期で福田時代の衰亡期だ。（堺 [1971] 『堺利彦全集』第四巻、433 ページ。)

『貧乏物語』が大評判になってから、わたしはまだ特別な注意を彼に向けたが、一面では、その不徹底なところに飽き足らなかった。しかし『社会問題管見』の中にある文章や、「外科医の独語」を読んだ時には、いよいよこれは本物だ

と大いにうれしく思った。

そのうちに『社会問題研究』が出た。わたしは明らかに河上君の進歩を認めた。ことにその真剣な態度に敬服せざるをえなかった。しかしまだどうも例の宗教道徳的臭味に不満を感じる点が少なくなかった。その点についてわたしはかなり無遠慮な批評を加えた。『抜きがたき人道主義の病』などというずいぶん無礼なことを申した。しかしわたしはモウ大体において彼を一個の同志と信じていた。[中略] そしてわたしの判断がだいぶ変わってきた。今ではわたしはモウ彼の宗教道徳的態度を難する必要がないと思っている。（同上、435 ページ。)

河上君は、「外科医が手術によって若干の健康を犠牲となしながら、しかもこれによって本来の健康を回復せんとすると、あたかも同じ趣」だとして、「階級闘争の絶無なる社会を実現せんがため」の階級闘争を必要としている。勝敗の批評よりも、わたしはただ河上君の態度がいよいよこれで明白になったことを喜ぶ者である。（同上、437 ページ。)

- (12) この点に関しては、三田 [2003] 第二章も同様な分析・指摘である。さらに深澤 [2018] で取り上げた幸徳秋水等々との親近性もかなり色濃いと考える（詳細は深澤 [2018] を参照）。
- (13) これらの点に関しては、深澤 [2016, 2017] を参照。
- (14) 住谷 [1962] はこの著作に関して、「ここにはマルクス主義的な理論のかけらさえもないが、革命主義的な情熱は溢れている」（165 ページ）としている。しかし、本稿上記の注（11）で示した堺利彦の言明にあるように、この著作はマルクス主義的な階級闘争の必要性を説いているものと読める。同様な主張は、大内 [1946] 185 ページを参照。
- (15) ちなみに杉原 [1980] 91 ページでは次のように示している。

〔河上肇の蔵書である〕有賀長雄『増補社会進



化論』(明治21年)の表紙裏にこうある、「大正7年[1918年]5月7日マルクス誕生百年の翌々日」。この書物の本文には何の書き込みもなく、河上がどうしてこれをこの時期に読んだかは不明だが、これを手にした日がマルクス生誕の百年の翌々日にあたるということがわざわざそこに書きしるされているのは、当時河上にはマルクスのことが強く意識されていたことをしめしているといつてよいだろう。

(16) ロシア革命直後日本への影響については、いくつもの指摘があつて注意を有するところである(詳細は深澤[2019])。しかし河上肇本人が本文で示したように、自ら語るところでは、その革命とマルクス主義との関係性、そしてマルクス主義の正しい理解、これらに彼は革命直後の当時早くから駆られていたことは明らかな事実である。

(17) この点に関しての詳細は、三田[2003]131ページ～を参照。

## 参考文献

- 安部磯雄 [1909.5.15～]「資本論」『社会新聞』。  
 大内兵衛 [1946]「解題」(河上肇 [1947]『貧乏物語』岩波書店、所収)。  
 大内兵衛編集 [1964]『河上肇』「現代思想大系」19、筑摩書房。  
 河上肇 [1982-86]『河上肇全集』1～28、続1～7、別巻、岩波書店。  
 櫛田民蔵 [1978-81]『櫛田民蔵全集』(新版)第一～五巻、社会主義協会出版局(初版は1935～1947年、改造社より)。  
 小林漢二 [1994]『河上肇—マルクス経済学にいたるまでの系譜—』(新版)法律文化社(初版は1992年、愛媛大学法文学部経済学科より)。  
 堺利彦 [1919]「福田時代から河上時代へ」『改造』1919年12月号(後に堺利彦 [1971]『堺利彦全集』第四巻、法律文化社、に所収)。  
 杉原四郎 [1980]「史料紹介 書物と人生—河上

肇文庫探訪記—」『甲南経済学論集』第21巻第3号。

住谷悦治 [1962]『河上肇』吉川弘文館。

日高晋ほか [1967]『日本のマルクス経済学』(上・下)青木書店。

深澤竜人 [2016]「投下労働量分析と唯物史観の統合」『山梨学院大学経営情報学論集』第22号。

—— [2017]「二つの経済学の相克と経済学学習の指—マルクス経済学と「限界革命」II—」『山梨学院生涯学習センター紀要』第21号。

—— [2018]「マルクス経済学(マルクス主義)導入時の検討—日本マルクス経済学史I—」『山梨学院生涯学習センター紀要』第22号。

—— [2019]「大正デモクラシー期におけるマルクス経済学の興隆に関して—日本マルクス経済学史III—」『山梨学院生涯学習センター紀要』第23号。

三田剛史 [2003]『甦る河上肇—近代中国の知の源泉—』藤原書店。

山川均 [1907.8.20～]「マルクスの『資本論』」『大阪平民新聞』。

—— [1919]「新運動の首途に立てる河上博士」(『雄弁』1919年春季増刊号、後に山川均 [1966]「個人の完成か組織の改造か—河上肇氏と福田徳三氏—」として『山川均全集』第2巻、勁草書房、に所収)。

古田光 [1959]『河上肇』東京大学出版会(1976年に選書版、2007年に新装版)。

## 【付記】

本稿校正中に知り得た以下重要な件について付記しておきたい。

河上肇の『貧乏物語』の原典である《『大阪朝日新聞』掲載の「貧乏物語」》に関して、この「貧乏物語」の掲載開始日が書籍によって(『河上肇全集』でも)1916年9月の11日と12日との食い違いが生じている(河上 [1982]『河上肇全集』9、3・

10・520ページなど)。さらに当日の新聞に関しても、夕刊という指摘も見受けられる（三田〔2003〕56ページ）。

これらに関して、筆者（深澤）の『大阪朝日新聞』データベースでの確認によれば、正確には9月12日朝刊からの掲載であり、9月11日の誌上では河上肇や貧乏物語の掲載はない。（当日における地方紙の存在までや、これらでの異同に関しては確認できない。）

これによって、河上肇による『貧乏物語』での書き出し、「是物語は、最初余が、大正五年九月十一日より同年十二月二十六日に亙り、継続して大阪朝日新聞に載せて貰った其儘のものである」という中の9月11日は、正確には9月12日の誤記であり、これがそもそもの発端となって、その後上記のような食い違いが現在まで生じてしまっているものと考えられる。